

辛雄鎮著、足立康翻訳、辛雄鎮翻訳「努力の証—第八代国連事務総長 潘基文(バン・ギムン)物語」
ダイヤモンド社 2008年10月9日刊を読む

まだ小学生だったころ、当時のビョン・ヤンテ外務大臣が全国の小学校をまわって講演したことがあった。

基文(ギムン)が強い印象を受けたのは「一生懸命勉強して、国の役に立つ人間になりなさい」という彼の言葉だった。ビョン・ヤンテ外務大臣のように外国をあちこち歩きまわりながら祖国のために働く人物がいることに驚いたのだった。

講演会の後に基文は家族や友達に向かって、「ぼくも国のためになる仕事がしたいな」と言うようになった。 P.10-11

基文(ギムン)にとって勉強が何よりの楽しみだった。 P.15

彼の動機は「人の自分よりもっと優れた者になりたい」という純粋な向上心だった。

彼にとって、勉強や学問はそれ自体が興味の対象だった。それまで知らなかったことをひとつひとつ、より深く理解できるようになることは、何ものにも比べられない大きな喜びだった。

基文(ギムン)は、(勉強に)集中できる瞬間を逃さないすべを身につけた。
みなぐっすり眠っている夜は、特に集中力が増すように思われた。

P.17

基文(ギムン)は、他人に認められるために勉強したのではなく、勉強そのものに魅せられ、心を奪われていた。貧しく困難な環境で育ったにもかかわらず、彼は出世を目指して勉強したわけでもない。ただ、真心こめて勉強し、そして勉強は彼の真心を裏切らなかった。

P.19

家計が苦しくなるにつれて長男の基文(ギムン)もこれまでのようにただ勉強だけに熱中しているわけにはいけなくなった。家が貧しくなったからといって、勉強を怠るようなことがあってはならない、と彼は思った。要するに、万事は自分の心がけしだいなのだ。

P.22

オンドル(家の床をあたためる韓国特有の暖房設備)の火を燃やすために薪(まき)を斧(おの)で割るのはつらい仕事であったが、基文(ギムン)にとって、それは貴重な体験だった。おかげで彼は机に向かって本ばかり読んでいた自分から脱皮し、困難に耐える力を自然に身につけることができた。

英語の授業の最初の何日かはアルファベットを習うのに忙しかった。

P.31

20 回以上書いてみて、基文(ギムン)はようやく一字ずつの文字の区別がつくようになった。

P.32

英語の先生の宿題はいつも「20 回」だった。単語にしろ、文にしろ、その日に学んだことは必ず 20 回ずつ書いてくることが要求された。

P.32

基文(ギムン)は、帰宅するとすぐ宿題に取りかかった。同じことを 20 回もくりかえすとえてして退屈してしまいがちだが、まだ英語に慣れていなかった彼には、それがたいそう有益に思われた。何度も単語や文を書いていると、いつの間にか、暗記してしまうのだ。

すると、英語の文章の内容が徐々(じょじょ)に頭に入ってきた。

P.33

中学 3 年の冬休み、基文(ギムン)は古本屋で「タイム」を小遣いをはたいて買い求めた。中学生の英語水準では単語の大部分がはじめて目にするものばかりだった。しかし、彼はめげることなく、辞書を片手に、一行ずつたんねんに読み進めた。たとえ数行でも、内容を理解できることを知って満足を覚え、自分が英語の雑誌を読んでいるという事実喜びを感じた。

P.33-34

高校生になり、(豚の飼育など)いろいろ家事を手伝うようになってからは、時がどんどん過ぎていき、勉強する時間が足りなくなった。だが、彼は、余ったわずかな時間をうまく使えば、素晴らしい成果をあげることを体得した。たとえば、授業の合間の 10 分間の休み時間をぼんやり過ごさずにちょっと予習と復習をしておけば、ずっとたやすく授業を理解することができた。余暇を有効に利用するということは、余った時間をできるだけ無駄にしないで、時間を管理することを意味する。つまり、どんなときにも、どんなことについても、常に最善を尽くすことを意味する。

わずかな時間を惜(お)しんで勉強すること。

うまずたゆまず努力すること。

P.42

高校 2 年生の英語の先生、金(キム)先生から、「よくやっている。その道をまっすぐ進め」という言葉をかけてもらって彼は力が湧(わ)いてくるのを覚えた。

P.44

「試験用紙がソウルの生徒と地方の生徒を差別するわけではない」と自分に言い聞かせ、黙々と(赤十字のアメリカ研修プログラムの)試験に取り組んだ。

P.51

ケネディ大統領は、「アメリカは諸君を歓迎する。赤十字の精神を忘れずに、お互いの国の発展に努力しよう」という内容の短い演説を行った。

ケネディ大統領は、基文(ギムン)に「きみの夢は」と問いかけてくれた。基文(ギムン)はためらうことなくさっそうと答えた。「外交官です」。それを聞くと大統領はにっこりと笑った。その瞬間、彼の心にきらりと鮮明にひらめいたものがあった。不思議な気分であった。「そうだ。僕の夢は外交官なんだ」。彼は心の中で再びくりかえした。 P.61

もし、金(キム)先生のような地方の高校ではまれに見る熱血漢の英語教師がいなかったら、もし18歳でアメリカを訪問する機会に恵まれなかったら、そして、もしケネディ大統領に会見できなかったら、基文(ギムン)の夢は固い種子のまま発芽することなく、地中に埋もれ、朽(く)ち果ててしまったかもしれなかった。どのようなすばらしい夢であろうと、水を注がなければ、けっして成長することはない。幸運にも、種子にたっぷり水を注いでくれる人びとに出会った彼は、自分の夢の幹と葉を豊かに育てることができた。 P.68

成績を向上させる基文(ギムン)の秘法とは、勤勉にノートを取ることだった。几帳面に筆記することによって、学んだ知識を整理して理解するだけでなく、いつでも取り出して、ふたたび勉強しておくのだった。

几帳面にノートを取るという点で、彼と肩を並べられる者はいなかった。正確に整理されたノートのおかげで、彼の成績は常に上位だった。体育の成績を除いて、彼はすべての科目でAを取り、ソウル大学の優等生に選ばれた。 P.76

基文(ギムン)は、常に手帳とペンを肌身離さず持ち歩いた。どのような情報でも、それに接するや否や、直ちにメモを取り、随時に整理することが習慣になった。人間の頭脳を大統領に例えるならば、彼の筆記力は卓越した補佐官の役目を果たした。 P.78

(林 明夫)

－ 2008年11月8日記－